



国立研究開発法人
水産総合研究センター

プレスリリース

平成27年5月28日
国立研究開発法人 水産総合研究センター

平成27年度 日本海マアジ長期漁況予報

—別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産総合研究センター
日本海区水産研究所がとりまとめた結果—

今後の見通し（平成27年5月～9月）のポイント

対象魚種：マアジ

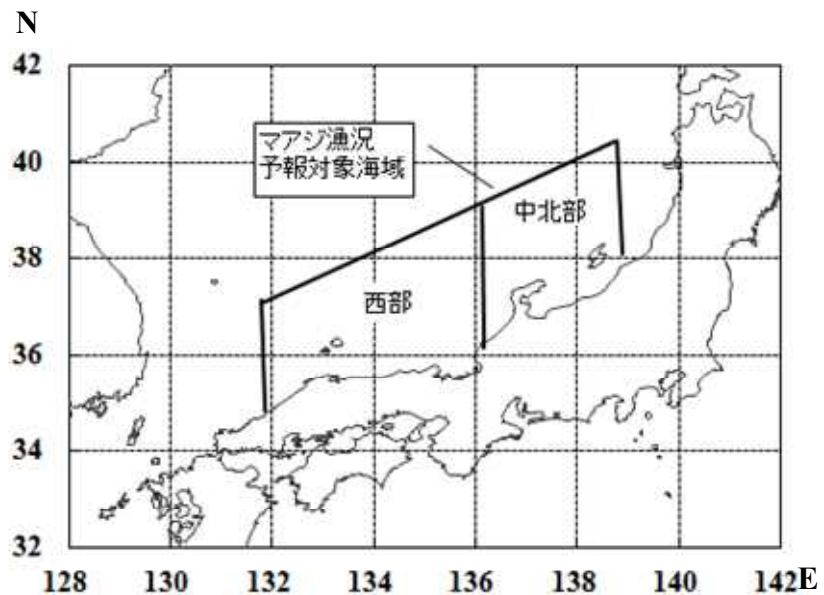
対象海域：日本海（西部：島根県～福井県、中北部：石川県～新潟県）

対象漁業：まき網、定置網

来遊量

西部・中北部とも
に前年を上回る

※「前年」は平成26年5
月～9月を示す。



問い合わせ先

国立研究開発法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所

担当：檜山、江連

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950

当資料のホームページ掲載先 URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://www.fra.go.jp/>

<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/>

平成 27 年度 日本海マアジ長期漁況予報

今後の見通し (2015 年 5 月～9 月)

対象海域：日本海（西部：島根県～福井県、中北部：石川県～新潟県）
対象漁業：まき網、定置網
対象魚群：0 歳魚（2015 年級群）、1 歳魚（2014 年級群）、
2 歳魚（2013 年級群）

- (1) 西部は 1 歳魚が主体で、夏以降は 0 歳魚の割合が増加し、
全体の来遊量は前年を上回る。
- (2) 中北部は 0 歳魚と 1 歳魚が中心で、前年を上回る来遊が見込まれる。

※「前年」は平成 26 年 5 月～9 月を示す。また、「体長」は尾叉長で測定した。

I 今後の見通しについて

1. 0 歳魚（2015 年級群）

今後の日本海西部における漁獲の主体は 1 歳魚（2014 年級群）で、初夏以降 0 歳魚（2015 年級群）の割合が高くなると思われる。2015 年級群（0 歳魚）については今後の海況によって加入量が大きく変動する可能性もあるが、東シナ海における着底稚魚の分布量と高い相関が見られる 4 月半ばの好適水温帯面積から 2014 年級群並みと見積もられる（平成 26 年度第 2 回対馬暖流系アジ・サバ・イワシ長期漁海況予報、西海区水産研究所）。

2. 1 歳魚（2014 年級群）および 2 歳魚（2013 年級群）

2014 年 5 月～6 月に日本海西部で行ったトロール調査によるマアジ稚魚の採集数と水温分布から算出した 2014 年級群の加入量指数（平成 26 年度日本海さば類・マアジ・マイワシ・ブリ長期漁況予報、日本海区水産研究所）は高い水準を示し、まき網の漁況も好調であった。よって 2014 年級群（1 歳魚）は 2013 年級群を上回ると考えられる。また、昨年の資源評価の結果及び漁況の推移から 2013 年級群（2 歳魚）は 2012 年級群を上回る豊度と考えられる。

3. 今期の来遊量

以上から、日本海西部の来遊量は、0 歳魚は前年並み、1 歳魚と 2 歳魚が前年を上回ると予想され、全体として前年を上回ると考えられる。日本海中北部の来遊量は、0 歳魚と

1 歳魚が中心で西部海域と同様前年を上回ると思われる。

Ⅱ 資源状態、漁況の経過（2014 年 4 月～2015 年 3 月）及び海洋環境について

1. 資源状態

マアジ対馬暖流系の資源量は 1970 年代後半に低水準であったが、1980 年～1990 年代前半に増加し、1993 年～1998 年に高い水準を示した。1999 年～2002 年に資源量は減少したが、2003 年～2004 年に資源量は増加した。2005 年以降の資源量は減少傾向を示したが、2008 年以降には加入量が増加したため、資源量もやや増加したと推定されている。

日本海で漁獲されるマアジは対馬暖流系群の一部である。日本海における資源の主体は、春季以降に東シナ海から九州西・北部、さらに日本海西部において産卵・ふ化し、0 歳魚として対馬暖流に沿って能登半島以北に分布を広げる。越年して 1 歳魚となると、春季に九州西・北部から日本海西部で漁場を形成し、その後中北部に分布を広げる。その後は地付き群として中北部で漁場を形成するものの他、東シナ海に移動して漁獲されるものもいると考えられる。

2. 漁況の経過（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

2014 年度（2014 年 4 月～2015 年 3 月）における島根県～新潟県の主要港における水揚げ量は 44,000 トン（各府県の速報値等の集計による）であり、好調であった 2013 年度（2013 年 4 月～2014 年 3 月）の 44,000 トンと同程度で、近年値（2009 年～2013 年度）平均の 40,000 トンを上回った（図 1）。

日本海のマアジの漁獲量はまき網と定置網によるものがほとんどである。定置網の占める割合は概ね 20%以下で、まき網の漁獲量の多寡が全漁獲量に大きく影響している（図 2、上）。2014 年度におけるまき網の漁獲量は 7 月～10 月および 3 月に 1 ヶ月あたり 4,000 トン以上の漁獲があり、2013 年度と同様好調に推移した。一方、2014 年度の定置網の漁獲量は、2013 年度をやや下回った（図 2、下）。

中北部の漁獲量（定置網が中心）は、7 月～9 月と 12 月以外は 2013 年度を下回り、特に春と冬には低調であった。西部の漁獲量（まき網が中心）は、2013 年度を上回る月が多く、全般的に好調であった 2013 年度を上回って推移した（図 3）。

3. 海洋環境

日本海に来遊するマアジは、中長期的に対馬暖流域の水温変動と正の対応関係が見ら

れる。期間中 6 月までの対馬暖流域の 50m 深水温は平年並みで経過すると予想されており（平成 27 年度第 1 回日本海海況予報、日本海区水産研究所）、全般的にマアジ漁況に与える影響は少ないと思われる。

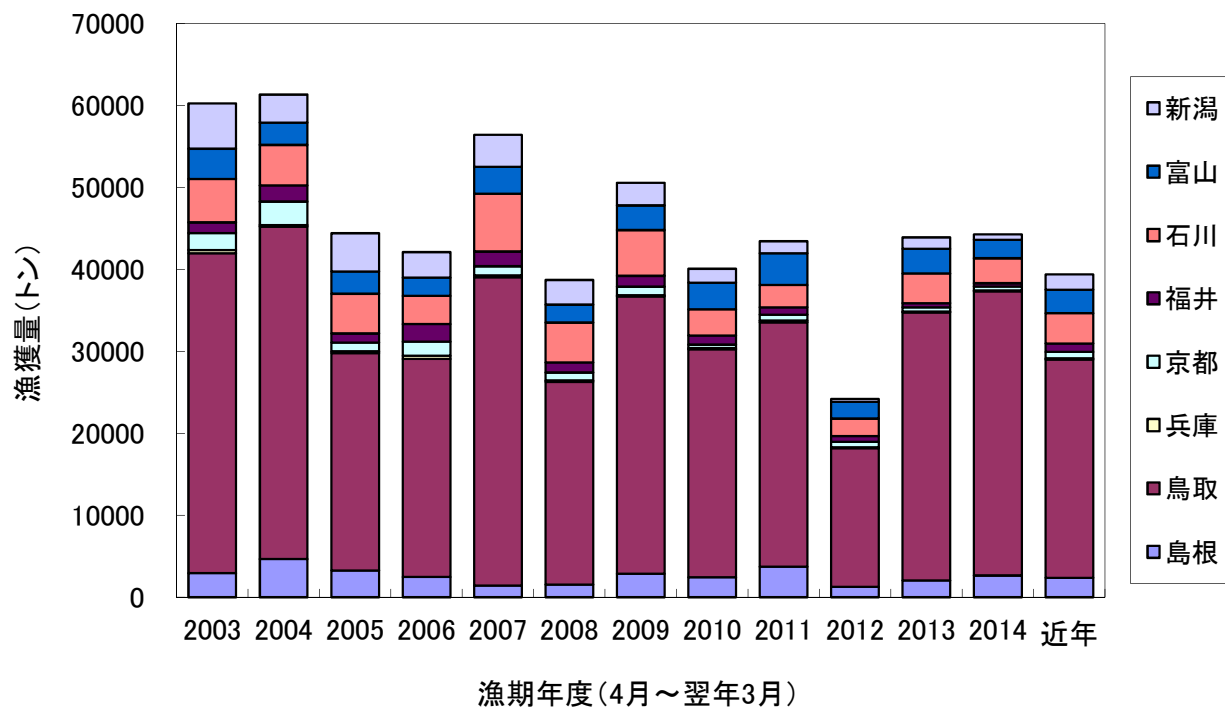


図 1 日本海主要港（島根県～新潟県）の水揚げ量の推移
近年値は 2009 年～2013 年度の平均値を示す。

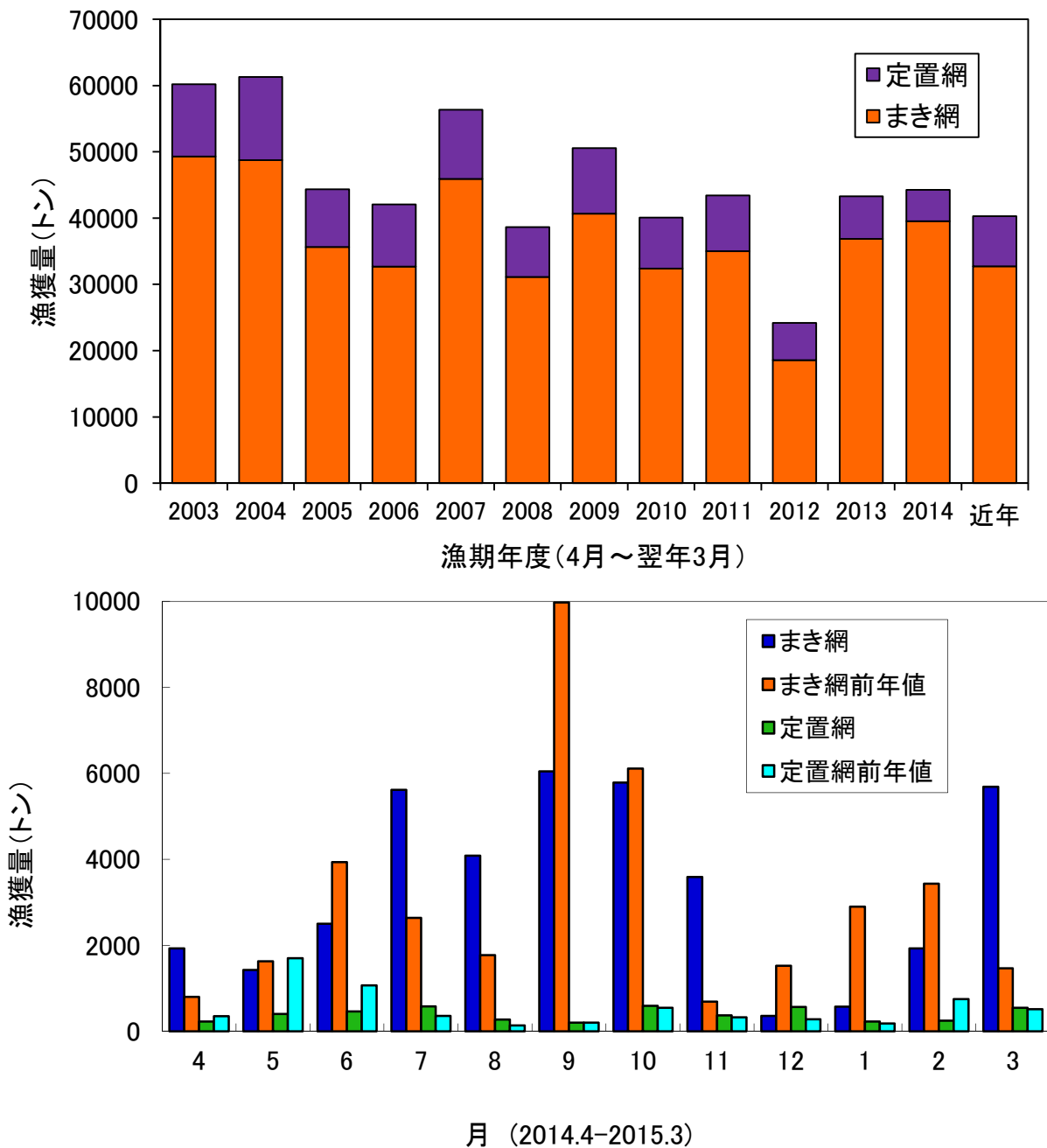


図2 定置網およびまき網の漁獲量の推移（上図、漁期年度：4月～翌年3月）と2013年度および2014年度漁期の経月変化（下図）
 上図の近年値は2009年～2013年度の平均値を示す。下図の前年値は2013年4月～2014年3月である。

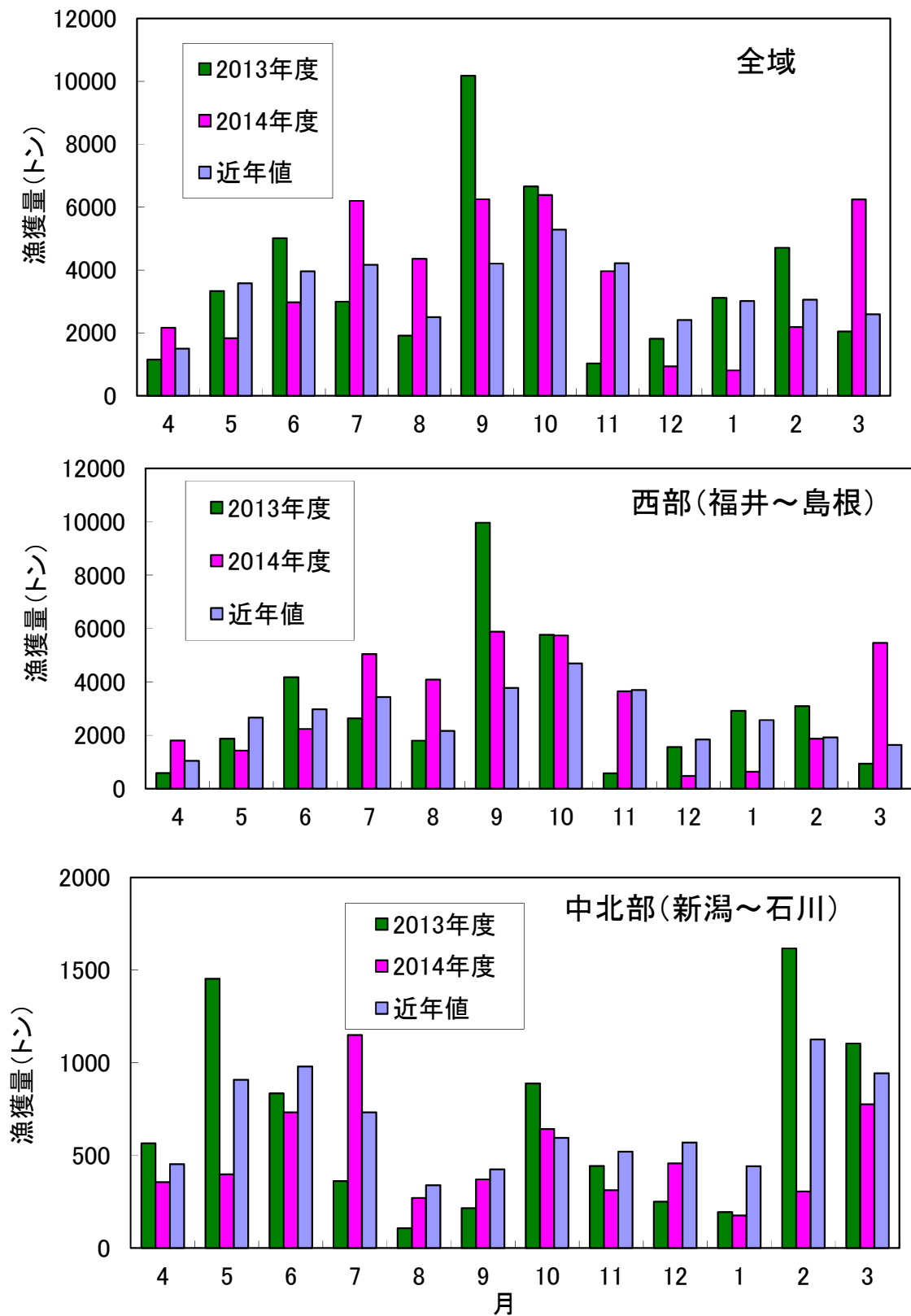


図3 海域別日本海主要港（島根県～新潟県）への月別水揚げ量の変化
近年値は2009年～2013年度の平均値を示す。

参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	京都府農林水産技術センター 海洋センター
秋田県水産振興センター	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
山形県水産試験場	鳥取県水産試験場
新潟県水産海洋研究所	島根県水産技術センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
石川県水産総合センター	国立研究開発法人水産総合研究センター 西海区水産研究所
福井県水産試験場	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所